地域と学校　その9

たかがトイレ、されどトイレ

小松 尚（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

爆弾低気圧が日本列島を包んだ1月のある日、今年初めて石樽（いしぐれ）小学校を訪れました。教頭先生は開口一番、「この冬で一番寒いですよ!」。竜ヶ岳や藤原岳など石樽を見下ろす山々には雪と厚い雲が被り、そこから冷たい風が吹きつけていました。旧大安町一帯は、かつては雪が膝まで積もり、寒冷地手当が支給された土地です。そんな寒い日でしたが、休み時間になると子どもたちは校庭へ駆け出していきました。

さて、今回のテーマは学校のトイレです。

公開ワークショップの反省

公開ワークショップの参加者アンケートでは、9割の人が新校舎の計画内容を「よくわかった」と答え、7割が「次回も参加したい」と答えていました。建設委員の方々は手ごたえとともに弾みを得たようでしたが、反省点もありました。参加者もアンケートに記していましたが、思ったほど参加者が集まらなかったことです。直後の建設委員会（第12回）では「告知時期が遅かった」「夕食時だった」「まだ地元の意見は反映されないと思われているのではないか」といった分析とともに、「授業参観日に父兄に知らせる」「計画を公開するスペースを学校に設ける」といったアイデアが交わされました。

新校舎をこれからの石樽の拠点にしていくためには、計画がどんなに優れていても知られていないのでは意味がありません。公開ワークショップはそれを理解する機会にもなりました。

5Kのトイレ

公開ワークショップまではこれからの石小や新校舎のあり方を議論し、一つの提案にまとめましたが、公開ワークショップ以後は第4回建設委員会で確認した4つの検討キーワード（学習環境の充実、生活環境の充実、地域開放、地域性の反映）から主に環境学習、福祉学習に関する空間のあり方、トイレ、管理運営方法について議論しました。その中から、子どもたちの学校生活に深く関係するトイレの議論をお話しします。

みなさんは、自分が通った学校のトイレを思い出せますか?　そして、どんな思い出がありますか?　大抵は、臭くて汚い、薄暗い、下駄やスリッパに履き替えるのが面倒くさい、床を水洗いするせいで靴下が濡れてしまい気分を害した、冬は寒い、さらには怖い先輩がいる等々、あまりいい思い出はないのではないでしょうか。トイレに行くのが楽しみだったという人は、まあいないでしょう。

それは今でも変わらないようです。「3Kの仕事」という言葉がありますが、子どもたちにとって学校のトイレは5K（臭い、汚い、暗い、怖い、壊れている）だと言われます。学校でトイレに用を足しに行けず、1日我慢する子もいます。大人からすれば、たかがトイレかもしれませんが、子どもにとっては重大事です。

この頃、設計事務所の2人は新校舎計画に子どもたちも何か参加できないかと思案していました。その第1弾として、トイレ計画に子どもたちの意見を反映させることになり、子どもたちの声をアンケートで聞くことになりました。

「明るい」トイレが欲しい

アンケート結果では、まず「明るい」トイレにして欲しいという意見が多く集まりました。もちろん照度の問題ではなく、当時の校舎のトイレは子どもたちにとって5Kだったからでしょう。また、一般に便器が洋式になっている家が増えていることを反映して、多くの子どもが洋式トイレを好みました。低学年ほどその傾向が強く、高学年は和式派と洋式派が半々でした。年齢が上がるにつれて、他人が座った座面に座りたくないという意識もあるようです。

さらに、ある商業施設のトイレのようにして欲しいという意見もありました。確かに最近の商業施設のトイレは、単に用を足す場所としてデザインされている訳ではないことに気づきます。やさしい色使いのインテリア、センサー反応の蛇口、ゆとりのあるブース、大きな鏡、車椅子利用者対応やベビーベッド、ベビーイスの設置、オストメイト（人工肛門・膀胱使用者）対応がされた多目的トイレなど、客として足を運んでもらうための配慮がされています。そういえば、最近乗った新幹線の新型車両N700系にも、オストメイト対応の多目的トイレが設置されていました。

関連して、近年、利用者による公共施設の計画検証が行われています。この地方では中部国際空港の計画時における利用者検証が先進事例です。検討されたのはトイレだけはありませんが、トイレに関してはモデルルームを作って障害当事者を交えて検討し、最終デザインが決定されました。

・黄トイレ（男子）の中
隅には小さなベンチもあり、用がなくてもやってくる子も。

・青トイレの入口
トイレとオープンスペースの間仕切りもセミオープンなので、双方の様子が伝わります。

トイレからの明るい声

第13回の委員会で快適なトイレとして、①明るいトイレになるような雰囲気作り、②掃除のしやすいトイレ、③使いたいときに使えるように適正な位置に分散させる、の3つのポイントが確認されました。実現したトイレは低・中・高学年のゾーンにそれぞれ1箇所、分散して配置され、同じように地域開放ゾーンでも分散して配置されました。

また、男女別に色分けするのではなく、低・中・高学年それぞれのトイレに黄・赤・青のアクセントカラーが採用されました。今では子どもたちが「黄トイレ!」と呼ぶことがあります。建設委員会では「カラフルな内装はクラクラしそう」という意見と、「いやトイレを使うのは一時のことだからカラフルでいいんじゃない」という両方の意見がありましたが、今のところは上手くいっているようです。

加えて、中・高学年のトイレはわっか型校舎中央の中庭に面しています。トイレの平面が円形だったり、ちょっと角度が振られたりして中庭に存在を示しています。トイレの窓を通して中庭の様子が感じられるので、中庭にいた私も何度かトイレにいる子どもたちから声をかけられました。その声は、教室にいるかのような明るい声でした。

地域にとっての学校のトイレ

トイレは地域との関係でも重要になっています。小学校は災害時の避難場所に指定されている場合が多く、避難時には様々な人が学校のトイレを使うことになります。それを見越して、多目的トイレを設置したりオストメイト対応をする学校も各地に生まれています。石樽小学校も避難場所に指定されていますが、まずは学校開放時の地域住民の利用を考慮して、地域開放ゾーンに多目的トイレが設置されています。

また、トイレではありませんが、授業参観日に授乳室が必要になったと教頭先生から聞きました。多様な来訪者のことを考えると、粗相をした場合のシャワー室も今後必要になるかもしれませんね。

また、子どもたちの屋外活動のために屋外にもトイレが設置されますが、校舎だけでなく敷地自体が公園のように公共空間として地域に開放されるようになると、この屋外トイレも要検討となります。石小ではあまり問題になりませんでしたが、都会の公園など公共空間にあるトイレは、周辺の住民から厄介者扱いをされる場合があります。

これをニンビー問題といいます。ニンビー＝NIMBY: Not In My Back Yardです。直訳すると「自分の家の裏庭には嫌」。つまり、街や社会には必要なものだけど、自分の間近にあっては困るという意識を示します。公衆トイレやごみ収集所、火葬場、原子力発電所といったいわゆる迷惑施設はこれに該当します。トイレは往々にして落書きがされたり器物が壊され、さらには犯罪の温床になることがあるので、使い勝手だけでなく位置やデザインも要注意です。

計画から管理運営の議論へ

このようなトイレに関する議論だけでなく、バリアフリーや環境学習に関する議論もされました。環境学習については、「みんなで実際に作りたい」とか「石樽らしい自然を活かしたい」という意見がありました。この議論は屋外環境計画の段階で再燃します。

また子どもたちの参画は、ガラス面の衝突防止マークのデザインや屋外トイレ入口の絵タイルなどで実現しました。衝突防止マークはいろんな絵柄があり、小さいですが気づくと一つずつ見て回りたくなるデザインです。

・ガラス面の衝突防止マーク
子どもたちが描いたイラストを編集して作成されました。

さて、石小にとって、また建設委員会のメンバーにとって激動の2002年が暮れる頃、新校舎計画の大枠が定まったのを受けて、設計事務所はそれを設計図書にまとめる作業に入りました。その一方で、建設委員会では竣工後の管理運営を考え始めようということになりました。

〈参考文献〉
学校のトイレ研究会「地域から生まれる新しい学校トイレ 進む学校トイレのパブリック化」2005 vol.8
谷口元他編著「中部国際空港のユニバーサルデザイン」鹿島出版会 2007